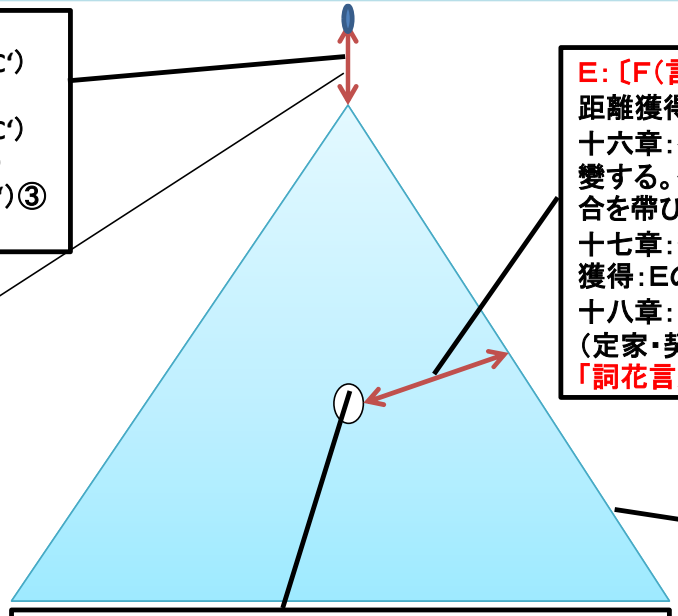
	小林秀雄著『本居宣長』:各章主題の「關係論」的纏め
十六章	①『源氏』論(物:場C')②作者の『心ばへ』(物:場C')③作品(物:場C')④准據(物:場C')⇒からの關係:⑦が①で採用した(D1の至大化)④は、「⑤:②の中で變質し、今度は間違ひなく③を構成する要素と化した④だけ。このやり方は徹底的であつた」(D1の至大化)⇒「⑥:物語の准據」(⑤的概念F)⇒E:外部に見附かつた⑥を作者の心中に入れてみよ、その性質は一變する。作者の創作力の内に吸収され、言はば創作の動機としての意味合を帶びる」(⑥への距離獲得:Eの至大化)⇒⑦宣長(△枠):②への適應正常。
十七章	①『帚木』發端の文(物:場C')②表現構造(物:場C')③『源氏』といふ物語の主人公(物:場C')④作者(物:場C')⇒からの關係:①の②(讀者に相談しかける)は、「⑤:③を描き出す(D1の至大化)④の技法の本質的(D1の至大化)なものを規定してゐる」(D1の至大化)⇒「⑥:『源氏』といふ人物の評價」(⑤的概念F)⇒E:それ(⑤)が、⑦の⑥に直結(Eの至大化)してゐる」(⑥への距離獲得:Eの至大化)⇒⑦宣長(△枠):①への適應正常。
十八章	①歌道(物:場C')②『物のあはれを知る』(物:場C')③『源氏』の詞花の姿(物:場C')⇒からの關係:⑥が①の上で②と呼んだものは、「④:②のやうな意味を湛へた③から、直に感知したもの」(D1の至大化)⇒「⑤:自分の經驗の質」(④的概念F)⇒E:『源氏』の詞花言葉を翫ぶといふ⑤を②と呼ぶより他はなかつた(定家・契沖・眞淵、及び潤一郎・白鳥の「享受と批評:經驗の語り口」との「詞花言葉を翫ぶ」質の違ひ)」(⑤への距離獲得:Eの至大化)⇒⑥宣長(△枠):③への適應正常。

(物:場C')
十六章:①『源氏』論(物:場C')②作者の『心ばへ』(物:場C')③作品(物:場C')④准據(物:場C')
十七章:①『帚木』發端の文(物:場C')②表現構造(物:場C')③『源氏』といふ物語の主人公(物:場C')④作者(物:場C')
十八章:①歌道(物:場C')②『物のあはれを知る』(物:場C')③『源氏』の詞花の姿(物:場C')

	からの關係(D1の至大化)
十六章	⑦が①で採用した(D1の至大化)④は、「⑤:②の中で變質し、今度は間違ひなく③を構成する要素と化した④だけ。このやり方は徹底的であつた」(D1の至大化)
十七章	①の②(讀者に相談しかける)は、「⑤:③を描き出す(D1の至大化)④の技法の本質的(D1の至大化)なものを規定してゐる」(D1の至大化)
十八章	⑥が①の上で②と讀んだものは、「④:②のやうな意味を湛へた③から、直に感知したもの」(D1の至大化)



E:〔F(言葉・概念)との附き合ひ方・用法〕・・・「So called」「Fと(△枠)との距離獲得」(Eの至大化)。
十六章:外部に見附かつた⑥を作者の心中に入れてみよ、その性質は一變する。作者の創作力の内に吸収され、言はば創作の動機としての意味合を帶びる」(⑥への距離獲得:Eの至大化)
十七章:それ(⑤)が、⑦の⑥に直結(Eの至大化)してゐる」(⑥への距離獲得:Eの至大化)
十八章:『源氏』の詞花言葉を翫ぶといふ⑤を②と呼ぶより他はなかつた(定家・契沖・眞淵、及び潤一郎・白鳥の「享受と批評:經驗の語り口」との「詞花言葉を翫ぶ」質の違ひ)」(⑤への距離獲得:Eの至大化)

(△枠)
十六章:⑦宣長(△枠)
十七章:⑦宣長(△枠)
十八章:⑥宣長(△枠)

F(言葉・概念)・・・
十六章:「⑥:物語の准據」(⑤的概念F)
十七章:⑥:『源氏』といふ人物の評價」(⑤的概念F)
十八章:「⑤:自分の經驗の質」(④的概念F)